第 28 回地域文化研究専攻主催公開シンポジウム

ぐうたら、酔いどれ、ならず者

—文学におけるアンチ・ヒーローの系譜—

2020 年 10 月 31 日（土）14 時〜17 時 30 分
オンライン（Zoom ウェビナー）

【プログラム】

13：30　開場

14：00　開会　専攻長挨拶　森井　裕一
趣旨説明　中尾まさみ

14：15　〈グロテスクな世界〉の現出
—ケベードのピカレスク小説におけるアンチ・ヒーロー像

竹村　文彦（地域文化研究専攻）

14：45　もう一つの生き方
—希代の怠け者オブローモフと過激な酔いどれヴェーニャの生涯

安岡　治子（地域文化研究専攻）

15：15　アメリカン・アンチヒーローの西部
—21 世紀のウェスタンとハードボイルド探偵小説におけるヒーロー像の変容

井上　博之（地域文化研究専攻）

15：45　＜休憩＞

16：00　コメント　上杉　未央（日本学術振興会 RPD）

山口　輝臣（地域文化研究専攻）

16：30　質疑応答

17：30　閉会

司会:　中尾まさみ（地域文化研究専攻）

第 28 回地域文化研究専攻主催公開シンポジウム
「ぐうたら、酔いどれ、ならず者―文学におけるアンチ・ヒーローの系譜―」

報告１：〈グロテスクな世界〉の現出
――ケベードのピカレスク小説におけるアンチ・ヒーロー像

地域文化研究専攻・中南米小地域　竹村文彦

＊パワーポイントのタイトルの画像は、ベラスケス画のケベードの肖像（ウィキメディア・コモンズより）

１．　ピカレスク小説について

◎ピカレスク小説：16 世紀半ばのスペインで誕生し、やがてイギリス、ドイツ、フランスなどでも書かれるようになった文学ジャンル。「悪漢小説」、「悪者小説」

◎スペインにおける代表作：
・作者不詳『ラサリーリョ・デ・トルメスの生涯』（1554）
　⇒ピカレスク小説の先駆け
　　主人公は強欲な祈祷師、けちん坊の司祭、貧乏貴族などに仕え、辛酸をなめる
・マテオ・アレマン『グスマン・デ・アルファラーチェの生涯』（2 部、1599、1604）
　⇒ピカレスク小説の定型を確立
　　ガレー船を漕ぐ刑に処され改心した悪者が、反面教師として読者に教訓を垂れる
・フランシスコ・デ・ケベード『ぺてん師ドン・パブロスの生涯』（1604 年ころ執筆）

◎ピカレスク小説誕生の背景：
〇流行していた「騎士道物語」に対する反動
・「騎士道物語」（代表作『アマディス・デ・ガウラ』）は、王侯貴族の恋と冒険を描く
　⇒主人公は理想化された「正義の味方」、ヒーロー
　⇒物語は現実離れして空想的
・『ラサリーリョ・デ・トルメス』は、こうした傾向に対する反動
　⇒身分の卑しい悪者、アンチ・ヒーロー
　⇒現実をきちんと捉えることを目指す（リアリズム）
・『グスマン・デ・アルファラーチェ』も同じ傾向を継承
☞「複雑な現実の提示」は、セルバンテスの『ドン・キホーテ』（2 部、1605、1615）でさらに徹底され、近代小説の重要な要素となる

◎スペインのピカレスク小説の定型：
1）主人公は身分の卑しい悪者
2）さまざまな主人（ときにはひとりの主人）に仕え、各地を渡り歩いて社会を諷刺

3）一人称自伝体：主人公本人が語り手の「私」となる
⇒下層階級の主人公の物語に必然的な形式

２.『ぺてん師ドン・パブロスの生涯』の概要
・作者フランシスコ・デ・ケベード（1580-1645）：バロック期を代表する散文家・詩人で、〈奇想主義〉の大家
⇒〈奇想主義〉：言葉遊びや機知に富んだ濃密な文体
・1604 年前後に執筆、写本で回し読みされたのち、1626 年に作者に無断で出版され、人気を博して版を重ねる
・「私」が「あなた様」に送った書簡という形式　⇒『ラサリーリョ』の形式を踏襲
・簡単なあらすじ：
卑しい生まれの主人公パブロスは貴族にあこがれ、騎士の子弟のお供としてカブラ学士の寄宿塾（⇒３.）やアルカラ大学へ行くが、処刑された父親（⇒４.）の遺産を受け取るために一旦セゴビアに帰郷し、叔父（⇒５.）の家で放埒な酒盛りに参加。マドリードに出る道中で知り合った偽貴族ドン・トリービオ（⇒６.）の導きで、彼の一団と行動を共にしたり、身分の高い娘との結婚をもくろんで大失敗したりしたあげく、セビーリャで親しくなった娼婦と新大陸へ旅立つ

◎以下の報告で示したいこと：
1）ピカレスク小説の枠組みを借りつつも、ケベードは本作で『ラサリーリョ・デ・トルメス』や『グスマン・デ・アルファラーチェ』が行なった現実性の追求とは違う方向をめざし、リアリズムに反するグロテスクな文学世界を現出した
2）ケベードの言語表現の巧みさ
⇒「ケベードの偉大さは言葉にある」（J. L. ボルヘス『続審問』中村健二訳、岩波書店、68 頁）

３．けちん坊の権化カブラ学士とその寄宿塾
・モデル：『ラサリーリョ・デ・トルメス』第２章で主人公ラサリーリョが仕える司祭
⇒ラサリーリョに与えるのは４日の１個のタマネギだけ
・カブラ学士の寄宿塾で、〈空腹〉のテーマが誇張されて再登場

◎カブラ学士の描写
・けち　⇒食費を惜しんで何も食べないので、がりがりに痩せた姿で描かれる

カブラ学士は吹き矢の筒そっくりの神父さんで、背丈ばかりが気前よく伸び*、〔……〕目は頭の後ろのあたりに居をかまえていて、深い籠の底から外を眺めているみたい。それくらい落ちくぼんでいて薄暗いので、そこは商人が店を出すにはおあつらえ向きで

す**。〔……〕。顎ひげはお隣の口が腹ぺこのあまり食ってかかりそうな剣幕なので、恐れをなして色を失い、歯は何本も欠けていて、これは怠慢および浮浪のかどで追放されたものと思われます***。喉は駝鳥のそれのように長く、喉仏はやたらとび出していて、まるでひもじさに耐えかねて食い物を探しに行こうとしているみたいです。腕はひからび、手は一束のぶどうの蔓そのもの。目を腰から下に移しますと、ひょろりと長い二本の足がついていて、フォークかコンパスに見えます。〔……〕。天気のいい日には角帽をかぶりますが、それはネズミが開けた猫の通り穴と垢の飾りでいっぱいの帽子で、かつて布であったものでできていて、フケの裏地がついております。〔……〕。ベッドは床の上にじかに置かれ、シーツを長持ちさせるためにいつもどちらか片方の側に寝ていました。(130-132 頁****。一部改変)

＊　原文の “largo”には、「長い」と「気前がよい」の二義がある

＊＊　当時の商人は、薄暗い場所で商品を売って、質の悪さをごまかすという悪い評判を立てられていた

＊＊＊　実際、浮浪者は追放、むち打ち、ガレー船を漕ぐといった刑罰に処された

＊＊＊＊　本作からの引用は、すべてケベード他『ピカレスク小説名作選』(⇒《参考文献》) より行なう

○〈断片化〉、〈物体化〉し、格下げされる人物像

・カブラ学士＝「生ける飢餓」、「元祖吝嗇」(protomiseria)、「吹き矢の筒」
　⇒概念や物体に格下げ

・カブラ（Cabra）＝「ヤギ」の意　⇒〈動物化〉

・目＝深い籠、喉＝駝鳥の喉、手＝ぶどうの蔓、下半身＝フォークかコンパス
　⇒身体が種々雑多なものに〈断片化〉し、〈物体化〉する

・ジュゼッペ・アルチンボルド（1527 頃-1593）の画風との類似
　⇒《庭師/野菜》(ウィキメディア・コモンズより)

・身体の部位の〈人間化〉：目、顎ひげ、口、歯、喉仏
　⇒各部位の独立性を意識させ、〈断片化〉の印象を強める

☞主人公パブロスの父親は、物理的に〈断片化〉される

◎カブラ学士の寄宿塾でのエピソード

○誇張による現実の歪曲

・「なかば幽霊と化した下男」が羊の肉を取り分けたが、「爪の間に入りこんだ分と歯の間にはさまった分でみんななくなってしまい、お腹はおあずけだけを食わされる仕儀になったのです」(133 頁)

・フーレという召使いは、「体のどこをどう使えば物が食えるのかをすっかり忘れて、手に入れたパンの皮を二度までも目に運んでしま」う（134 頁）

・授業で朗読を命じられた主人公パブロスは空腹のあまり、「読むはずの言葉を半分くらい

は飲みこんで*、それを朝飯にしてしまいました」（137 頁）

＊原文の“comer”には、「食べる」と「（言葉を）言い抜かす」の二義がある

・疥癬（かいせん）や霜焼けを「餓死」させるため、寄宿塾の玄関に患部を入れる人々

・寄宿塾から「救出」されると、探検隊が招へいされ、パブロスたちの「顔をくまなく歩き回って両目のありかを探しました」（142 頁）

・医師団は、パブロスたちの口に積もった埃をはたきで払い落とすように命ずる

4．主人公パブロスの父親クレメンテ・パブロ

・表向きは床屋、裏で泥棒

・見栄っ張りで、自分の真の姿を隠し、人に肯定的なイメージを与えようとする

⇒「虚栄心」は、ピカレスク小説の重要なテーマ。本作の多くの登場人物も共有する

・自分の職業の呼び替え：「床屋」⇒「頬の毛羽刈り職人」、「顎ひげの仕立て師」

・「お前、物をかっぱらうってのは肉体労働なんかじゃない。頭脳労働なんだよ」（120 頁）

・語り手の語りも、見栄っ張りの登場人物たちをからかう文体：

⇒「〔親父は〕止んごとない家柄の出だそうですが、なるほど止むことない酒飲みではありましたから、このうわさは信じでよろしいかと存じます」（117 頁）

→文の前半で肯定的な虚像を示し、後半で仮面を剥奪して正体をあばく

⇒「〔親父が〕牢屋を出るときにはこの上ない栄誉に浴していて、二百人もの枢機卿（cardenales。「あざ」の意も）を付き従えていたそうです。もっとも、どなたも「猊下様」と呼べる方ではありませんでしたが」（118 頁。一部改変）

・最後には、死刑執行人の弟（パブロスの叔父）の手で処刑され、八つ裂きにされて道ばたに放置される

・パブロスに宛てた叔父の手紙の一部：

> 父さんは鐙（あぶみ）に足もかけずに、ロバの上にさっととび乗った*。上っ張りもよく似合って、まるで彼のためにあつらえたようだった。〔……〕窓辺を見上げたり、彼の姿を見るために仕事をほっぽり出してきた連中に会釈をしたりしながら泰然自若として進んでいった。〔……〕〔絞首台の〕段のひとつがひび割れているのに気がつくと、司直の連中の方に向きなおって、みんながみんな自分のように肝がすわっているわけではないから、次の人のためにここを修繕しておくようにと注意した。その態度が皆の目にどんなに立派に映ったかは、とても言葉にできるものではない。〔……〕。父さんは足をぴんと伸ばしたまま、顔の表情ひとつ変えずに落ちていってぶら下がったが、その重みある姿たるや文句のつけようがなかった。（175-176 頁）
>
> ＊罪人の引き回しに用いられるロバに、そもそも鐙はない

・死刑の執行という悲惨な事実と、英雄の最期を描くかのような称賛の言葉のへだたり

⇒ブラック・ユーモア

5．パブロスの叔父アロンソ・ランプロン
・パブロスの父親と同じく、皮肉のきいた文体で紹介される：

この叔父はあらゆる美徳の擁護者で、セゴビアでは正義にたずさわる人士として名をはせておりました。実際、四十年このかた、かの地における社会正義の行使は、ことごとく叔父の手を通じてなされたのです。ありていに言えば、この人は死刑執行人だったのですが、仕事の腕はぴか一で、彼が職務を遂行しているところを見ると思わず自分もやってもらいたくなるのでした。（174-175 頁）

・「あらゆる美徳の擁護者」、「正義にたずさわる人士」
⇒「社会正義の行使」　⇒「死刑執行人」
・自分の仕事への叔父の自負の念：
⇒「わしら一族の名誉がこういった形でけがされるのは迷惑千万な話だが、ことにわしの場合は何といっても国王の臣下なのであって、親戚にこんな人がいてくれては何かと都合がよろしくないのだ。」（177 頁）
⇒「お前くらいラテン語と修辞学に通じていれば、吊るしの芸術の第一人者になれることは請け合いだ」（177 頁）

◎叔父の家での酒盛り
・パブロスは父親の遺産を受け取るため、叔父の家を訪ねる
・叔父の家の階段は、「上までのぼり切ってそこで何が起こるかを見とどけない限り、首吊り台の階段とどこが違うのかはっきりしないしろものでした」（210 頁）
・叔父の 3 人の友人たち（お布施集め、豚飼い、捕り方）の来訪
⇒捕り方の「顔はそこいらじゅう針の縫い目だらけで、まるで毛糸の編み物みたいです」（211 頁）
・肉入りのパイが出てくると、一同は故人の魂のために冥福の祈りを捧げてから、それを平らげる
⇒当時のパイ職人には、いかがわしい肉をパイに入れるという悪い評判があった
・一同はすぐに泥酔し、「〔叔父の〕片方の目はうとうとと舟を漕ぎ、もう片方の目はぶどう酒の中を泳ぎ回っていました」（213 頁）
・お布施集めは立ち上がろうとしてテーブルを倒し、全員をスープの汁だらけにしてしまい、豚飼いとの間で喧嘩が勃発：
⇒「募金係が相手の頬に噛みついた折りも折り、気を荒立ててころげ回ったのがたたってか豚飼いは食べたものを惜しげもなく敵の顎ひげに吐き出してしまったのです」（214 頁）
・翌朝には、「部屋は酔っぱらいのお腹をすすいで戻った水〔＝吐いたもの〕と、飲まなかったはずなのにどこからか出てきた水〔＝小便〕とで出戻りワインを安飲み屋と化していま

す」(216 頁)
⇒糞尿譚（スカトロジー）　⇒【参考 2】

6．偽貴族ドン・トリービオとその一団
・モデル：『ラサリーリョ・デ・トルメス』第 3 章でラサリーリョが仕える貧乏貴族
⇒「武士は食わねど高楊枝」の典型
人柄は悪くないが素寒貧で、召使いのラサリーリョに逆に養ってもらう
・〈身なり〉によって高貴な身分を装う
⇒パブロスの父親は、〈言葉〉によって肯定的な自己像を投影

◎ドン・トリービオとパブロスの出会いの場面
・マドリードに出る道中でパブロスは、「立派ないでたちの郷士」を見かける
⇒「マントを羽織って腰には剣をさし、吊りズボンに長靴をはき、ひだ襟（えり）をつけて帽子をはすかいにかぶっています」(219 頁)。
・郷士が後ろを振り向いた拍子に、吊りズボンが落ちる
⇒「男のシャツのすそは右半分しか見当たらず、お尻は女たちがショールで顔を隠して左目だけ出している、そんなときみたいな恰好で覆われているのです」(220 頁)。
→「お尻の目」が丸出し
・エピソードのレベルにおける仮面の剥奪
・貧乏人であることを認めた郷士は、他人の家で食事にありつく手口や、身なりで人目を欺く方策をパブロスに伝授する
・本名：ドン・トリービオ・ロドリゲス・バリェーホ・ゴメス・デ・アンプエーロ・イ・ホルダーン
⇒鐘の音のように「ドン」で始まり「ダーン」で終わる、響きの高い名前

◎ドン・トリービオの属する偽貴族の一団とのエピソード
・ズボンの代わりに脚にボール紙を巻き、ガウンで隠している男
・継ぎ当てがないため「幅広半ズボン病」がよくならず、2 週間も床に臥せている男
・一団が身支度を整える様子：

仲間の一人がちぎれて十二枚のぼろ切れになったシャツを十二回に分けて身につけて、ちょうどミサのために身支度をととのえる司祭みたいに一回一回お祈りを唱えているところは、見ていて愉快でした。ある者はズボンの横町のなかで片足を迷子にしてしまい、とんでもないところからそれが顔を出すのに再会するはめになりました。またある者はチョッキを着るのに案内人を依頼したものの、半時間もみ合ってもまだけりが付けられずにおります。(236 頁)

・オランダの画家ヒエロニムス・ボス（1450 頃-1516）への言及
　⇒《快楽の園》（部分）（クリエイティブ・コモンズより）
・聖職者に対する悪ふざけ　⇒偽貴族の一団＝修道僧たち

〇偽貴族の一団の牢屋入り
・盗品の転売をきっかけに、もろもろの悪事が発覚して一団は投獄される
・牢屋へ引き立てられてゆく彼らの様子は、「つぎ当てだらけの斑（まだら）の馬がいる、赤と白を混ぜ合わせたロゼのぶどう酒がいるといったあんばい」（254 頁）
　⇒動物（馬）や物（ぶどう酒）への下落
・牢屋で偽貴族たちは、古株の囚人たちから「新入り税」を要求されるが、金がなくて支払えないため、夜中に綱で打たれ、レンガや石を投げつけられる
・難を逃れようと一団が互いに体を押しつけ合うと、「台のすき間にひとり残らず収まってしまったのです。そのありさまときたら、まるで髪の毛に生みつけられたシラミの卵か、寝床に入った南京虫といったところでした」（258 頁）　⇒虫けらへの矮小化
・「上着はあえなく討ち死にし、もはやまっすぐ立っていられるぼろ切れもありません」(258 頁）　⇒衣類の〈人間化〉
・偽貴族たちは、「新入り税」は服で支払うと申し出て許してもらうが、「その時にはもう髪の毛よりもたくさんの瓦（かわら）を頭に生やしておりました」（259 頁）
・翌朝、さっそく服を差し出すが、「連中の服をみんなかき集めてみてもランプの芯ひとつにもならないということ」（259 頁）が明らかになる　⇒誇張

７．まとめ
『ぺてん師ドン・パブロスの生涯』においては、登場人物の多くが〈物体〉か〈動物〉であるかのように描かれ、エピソードのレベルでも極端な誇張によって現実はゆがんだ形で示される。彼らが〈言葉〉や〈身なり〉でまとった仮面は無残にはぎ取られ、醜悪な姿が暴かれる。ここにブラック・ユーモアや糞尿譚なども加わり、〈グロテスクな世界〉が現出している。本作が目指したのは、同じピカレスク小説の『ラサリーリョ・デ・トルメスの生涯』や『グスマン・デ・アルファラーチェの生涯』のリアリズムとはまったく違う方向であった。

【参考 1】　『ぺてん師ドン・パブロスの生涯』のあらすじ
　父は床屋で泥棒、母は売春あっせん人で魔女のユダヤ人。主人公パブロスは、こんな家柄を恥じて貴族を夢みる。騎士の子息のお供としてカブラ学士の寄宿塾やアルカラ大学へ行くが、新人いじめにあって悪者になる決心をする。死刑執行人の叔父から父を絞首刑にした旨の手紙がとどき、セゴビアに帰郷するが、道中、献策家、剣術士、へぼ詩人、空いばり屋の兵士などと出くわし、常軌を逸した彼らの言動を大いに笑う。酒盛りで叔父とその友人たちの泥酔ぶりにあきれ果てたのち、遺産を手にするとマドリードに出て、偽貴族の一団に加わったり、身分の高い娘との結婚をもくろんで大失敗したりしたあげく、物乞い、劇作家、修道女の愛人などをへてセビーリャでならず者の仲間となり、親しくなった娼婦と新大陸へ旅立つ。

【参考 2】　『ぺてん師ドン・パブロスの生涯』における糞尿譚の一例

・主人公パブロスは、偽貴族の一団とともに牢屋に入れられる。彼の枕元には便器があり、「夜もふけると囚われの者たちが引っきりなしにやって来ては、そこで囚われた物を釈放していく」（254 頁）

・あまりに臭いので、パブロスが便器を他の場所へ移動してほしいと他の囚人に訴えると、なぐり合いの喧嘩になり、便器がひっくり返って大騒動に

・皆に非難されたパブロスは言い訳をして、囚人たちが「夜っぴてお尻の目をぱっちり開けているものだから、こちらは顔の目を閉じることが全然できなかったのだ」（255 頁）と言い返す

《参考文献》

ケベード他『ピカレスク小説名作選』（牛島信明・竹村文彦訳）、スペイン中世・黄金世紀文学選集 6、国書刊行会、1997 年

ケベード、ル・サージュ、フィールディング『悪漢小説集』（桑名一博・中川信・神山栄真訳）世界文学全集 6、集英社、1979 年

作者不詳『ラサリーリョ・デ・トルメスの人生』（岡村一訳）、水声社、2018 年

『バロックの箱』（会田由・牛島信明・吉田彩子・桑名一博訳）澁澤龍彦文学館 2、筑摩書房、1991 年

Clamurro, William H., *Language and Ideology in the Prose of Quevedo*, Delaware, Juan de la Cuesta, 1991.

Cros, Edmond, *El* Buscón *como sociodrama*, Granada, Universidad de Granada, 2006.

Iffland, James, *Quevedo and the Grotesque I, II*, London, Tamesis Books Ltd, 1983.

Molho, Maurice, *Introducción al pensamiento picaresco*, Salamanca, Anaya, 1972.

Navarro Durán, Rosa, *《La vida del Buscón llamado don Pablos》: Francisco de Quevedo*, Barcelona, Laia, 1983.

Quevedo, Francisco de, *La vida del Buscón llamado don Pablos*, ed. de F. Lázaro Carreter, Salamanca, Universidad de Salamanca, 1980 (Segunda edición).

Quevedo, Francisco de, *La vida del Buscón*, ed. de F. Cabo Aseguinolaza, Barcelona, Real Academia Española, 2011.

Rey, Alfonso (ed.), *Estudios sobre el* Buscón, Navarra, Universidad de Navarra, 2003.

Rey, Alfonso, *Lectura del* Buscón, Valladolid, Universidad de Valladolid, 2014.

Rey Hazas, Antonio, *Deslindes de la novela picaresca*, Málaga, Universidad de Málaga, 2003.

Rico, Francisco, *La novela picaresca y el punto de vista*, Barcelona, Seix Barral, 1982 (Tercera edición).

Smith, Paul Julian, *Quevedo. El* buscón, Valencia, Grant & Cutler Ltd, 1991.

Spitzer, Leo,《Sobre el arte de Quevedo en el *Buscón*》en *Francisco de Quevedo (Escritor y Crítica)*, ed. de G. Sobejano, Madrid, Taurus, 1978, pp. 123-184.

2020 年 10 月 31 日地域文化研究専攻シンポジウム

「もう一つの生き方――希代の怠け者オブローモフと過激な酔いどれヴェーニャの生涯」

安岡治子

イワン・アレクサンドロヴィチ・ゴンチャロフ(1812-1891)の生涯における主な出来事。(『オブローモフ』が完成するまで)

1812 ヴォルガ河畔、シンビルスク市で生誕。(ヴォルガ河はヨーロッパ・ロシアとアジア的ロシアの境)商人の家だが、むしろ地主貴族の暮らしに近かった。

1823 モスクワ商業学校に入学したが、後に希望退学。文学に熱中。

1831 モスクワ大学文学部入学。

1834 同大卒業後、シンビルスクへ帰り、県知事秘書となる。

1835 ペテルブルグへ。大蔵省外国貿易局に翻訳官(フランス語、ドイツ語、英語)として就職。詩や小品を書き始める。

1844 『平凡物語』発表。

1849 「オブローモフの夢」(後の『オブローモフ』第一部第 9 章)を発表。

1850 『オブローモフ』第一部完成。

1851 母、アヴドーチヤ・マトヴェヴナ死去。

1852-55 プチャーチン提督付秘書官としてフリゲート艦パルラーダ号で世界周航→ロンドン→大西洋→喜望峰→長崎→沿海州→イルクーツク(シベリア)→ペテルブルグ(1853 クリミア戦争勃発)

1856 文学検閲官となる

1857 ドイツの鉱泉地マリエンバードでの休暇中、創作意欲高揚。『オブローモフ』第二部〜四部を一月で執筆。

1858 旅行記「フリゲート艦パルラーダ」発表。

1859 『オブローモフ』発表。ドブロリューボフ 評論「オブローモフシチナとは何か」発表。

1861 農奴制廃止

Е. В. Толстая. Портрет работы Н. А. Майков

オリガのモデルと言われる
エリザヴェータ・トルスタヤ

И. А. Гончаров. Фотография 18

1856年の
ゴンチャロフ

『オブローモフ』主要登場人物

・イリヤ・イリイチ・オブローモフ　Илья Ильич Обломов ←обломок（遺物、名残、欠片）first name も父の名前もイリヤである。物語の始まりでは 32-33 歳。地主貴族。ペテルブルグに住むようになって 12 年。お気に入りの「本物の東方的ガウン」。

・アンドレイ・イワノヴィチ・シュトルツ　シュトルツ←Stolz（誇り）オブローモフの幼馴染。快活、活発な行動派。父親はドイツ人。ロシア各地のみならず、英仏独などヨーロッパ各地にも足を伸ばす実業家。

・オリガ・セルゲヴナ・イリインスカヤ　イリインスカヤ Ильинская←Илья　20 歳。両親は亡くなり、伯母と暮らす貴族の娘。積極的、エネルギッシュで、強い意志、聡明さ、自由な気質。歌の才に長け、Casta diva!を得意とする。

・アガフィヤ・マトヴェヴナ・プシェニツィナ　プシェニツィナ Пшеницына←пшеница（小麦）町人。未亡人。二人の子持ち。料理が得意。オブローモフは、絶えず動く彼女のむっちりとした二の腕、肘に見惚れる。

・ミリトリーサ・キルビチエヴナ　第一部第九章「オブローモフの夢」に登場。幼いオブローモフは乳母に聞かされたお伽話の美しき善良な魔法使いミリトリーサ・キルビチエヴナに憧れる。第四部でアガフィヤと暮らすようになってから、オブローモフは再びミリトリーサの姿を夢想する。

・イリヤ・ムーロメツ　「オブローモフの夢」で乳母が語ったロシア英雄叙事詩最大の hero として、ちらと登場する。

『オブローモフ』あらすじ

19 世紀前半の Bildungsroman（自己形成小説）が盛んであった時代には珍しく、活発なプロットの展開も、主人公の変化・成長もほとんどない。（ベケットが『ゴドーを待ちながら』を書く前に『オブローモフ』を読んだと言われている。）プロットは極めてシンプル。四部から成る。

・第一部　春　オブローモフの眠りと目覚め

ペテルブルグのほぼ中心地の大きなアパートの住まいで、ある朝、イリヤ・イリイチ・オブローモフが寝ている。

> 「オブローモフが寝ているのは、病人や、眠りたいと思っている人の場合のように、それが必要だからというのでもなく、また疲れた人の場合のように、たまたまそうしているというのでもなく、また怠け者の場合のように、それが快楽だからというのでもなかった。寝ているのは彼の常態だったのである。」

珍しく朝早く八時頃に目を覚ました彼は、起きて顔を洗うでもなく、領地経営など、片付けねばならぬ問題の解決には一歩も踏み出せぬまま、空しく時間が過ぎてゆく。オブローモフはいつもお気に入りの正真正銘の東方風のガウンを着ており、これが彼の停滞・受動性を象徴する姿なのだ。この日は、五月一日、郊外のエカテリンゴフで春の始まりを祝う行楽祭に出かけようと、次々と友人たちが誘いに来

るが、オブローモフは彼らが目まぐるしく駆け回る様子を見て、呟く。

「あれで生きているって言えるのかな？　人間ってものをどこかに置き忘れたみたいじゃないか！」

徹底的な怠惰と無気力に陥っているものの、オブローモフに何の才能も知力も無いわけではない。特に詩には魂を揺さぶられるし、高邁な思想を愉しみ、思索に耽ることもできる。ただ何一つ具体的な行動を起こせぬままに無為の時を過ごすいわゆる「余計者」なのだ。彼自身もそれを痛いほど感じていた。

「自分の中には何かしら明るい良い本質が墓に埋められたように埋もれている。それはもう死んでしまったかもしれない。言わば何者かが、世界と人生が彼に贈った宝を盗んで彼自身の魂の中に埋めてしまったようなものだ。人生の活動舞台へ乗り出して、意志と知性の帆をいっぱいに張ってまっしぐらに突進してゆくことを何かが妨げたのだ。」

やがてオブローモフは睡魔に襲われ、眠りに落ちる。そこで彼が見る夢が、全編に先立って書かれた「オブローモフの夢」だ。ここでは彼が幼年時代を過ごした故郷のオブローモフカ村の日常が描かれる。人々の関心は毎日の食事、キリスト教の各種記念日の祝祭行事にもっぱら向けられ、外部の世界や新しい事象は極端に恐れ忌避する。幼いオブローモフは乳母に聞かされたお伽話の善良な魔法使いミリトリーサ・キルビチエヴナに憧れ、誰もがぶらぶら何もせずに遊ぶことしか知らず、心配事も悲しみも無いこの世の楽園にしきりに惹かれる。

彼の眠りは、突如現れた幼馴染シュトルツの登場によって破られる。

・第二部　夏　オブローモフの恋

シュトルツは父親がドイツ人であり、オブローモフカ村の隣の領地の管理人であり、私塾を開いていたので、オブローモフとはそこで共に学んだ幼馴染だった。しかし、彼の資質はオブローモフとは正反対で、快活・活発な行動派、ロシア各地のみならずヨーロッパにも足を伸ばす遣り手の実業家である。彼は、オブローモフがペテルブルグでの官吏の仕事も社交界からも早々と引退して停滞の泥沼に嵌まっているのを救い出したくて堪らない。外国旅行にも誘い出そうとするのだが、オブローモフは、

「誰がアメリカやエジプトなんかまで行くもんか！　イギリス人なら行くかもしれんがね、連中は、神様があんな風に創られたからね。それに、自分の国じゃ住む場所がないだろ。だけど、我が国で出かけて行く者なんていやしないよ！」

オブローモフが反駁するのは、外国旅行ばかりではない。あくせくした生活、いつも我先きにと走り周りろくでもない貪欲に憑りつかれて互いに侮辱し合う生活だ。彼の理想とするのは、穏やかな自然の中での平安な静かな生活であり、その理想郷の描写を聞いたシュトルツは、「いやあ、君は詩人だなあ！」と言う。それに答えてオブローモフは、「そう、生活における詩人さ。生活は詩だからね」と答えるの

だが、シュトルツは、「そんなのは生活じゃない。オブローモフ流暮らし обломовщина だ」というのだ。

ここでシュトルツが考えついた言葉がオブローモフシチナ обломовщина という単語だが、「オブローモフ気質」とも「オブローモフ病」とも訳される。急進的インテリゲンツィアのドブロリューボフは、この作品が発表された直後「オブローモフシチナとは何か」という論文で、オブローモフのような意気地なしの甘ったれを作り上げたのは、農奴制に他ならないと論じた。たしかに自分で靴下を履くこともできない地主貴族を創り出したのは農奴制であろうが、オブローモフシチナの根源はもう少し複雑なものだ。

シュトルツは「今でなければ二度とできないぞ！」Теперь или никогда! (Now or never!)という言葉を残し、パリで待っていると言って、旅立ってゆく。オブローモフもさすがにシュトルツの言葉に動かされて旅券まで取って、今にもパリに行きそうになるのだが、出発の前の晩に唇が腫れてしまう。「いやだなあ、もう、こんな唇で海を渡るわけにはいかないよ！」と、結局は旅立たない。

シュトルツは言葉の他に、オブローモフの気力を奮い立たせるために、オリガ・イリインスカヤという二十歳の溌剌とした女性にその任務を託して行った。オリガは何事にも興味を抱き、積極的で強い意志、自由な気質を持った聡明な女性であり、歌の才にも長けている。彼女の Casta diva!は、オブローモフの心を揺さぶり、オブローモフは生まれて初めて恋をする。オリガも初めはオブローモフに規則正しい生活をさせ、立ち直らせよ、というシュトルツの命令に従って彼を導こうとしていたのだが、次第にオブローモフを愛おしく思うようになる。

> 「オリガは、その若さにも関わらず、この恋愛関係で第一の主役は自分であり、相手からは意志の働きや積極的な思考は何一つ期待できないということがわかっていた。」

毎日のように夏の別荘地で逢瀬を重ねる二人は互いに強く惹かれるのだが、オブローモフは、二人の間に生まれつつある「情欲」に本能的な恐怖を覚え、「ああ、恋のこの温もりだけを味って、その不安を味わわずにすめばなあ！」などと空想する。一方オリガは自身の中で「目覚めを迎えている新しい力の躍動」に気づき、優柔不断なオブローモフとの逢瀬にフラストレーションを感じ神経性の発作を起こすようにもなる。オブローモフは一旦は、「あなたは私を愛しているのではありません。私はあなたが待ち受けて夢にみていた男性ではありません」という手紙をオリガに送るのだが、オリガの情熱に押し切られるように、ついに彼女にプロポーズをする。

・第三部　秋・冬　オブローモフの失恋

季節は秋に移ろうとしている。オブローモフは、別荘からペテルブルグでもネヴァ河を渡った町はずれの家賃の安い、二人の子持ちの未亡人、アガフィヤ・マトヴェヴナ・プシェニツィナの家に移り住むようになる。オリガとの結婚のために新居の準備も必要なのに、その資金の算段に領地へ行って管理をし直すだけの決心がつかない。やがて冬になり、ネヴァ河が凍結し橋も架かったのに、オブローモフがオリガを訪ねる間隔は間遠になってしまい、ついに痺れを切らしたオリガ自身が河を渡ってオブローモフを訪ねて来る。その時はまだ、オブローモフは「ああ今僕を燃やしているこの炎が明日もいつも僕を燃やしてくれたらなあ。だって君がいないと、僕は火が消えて、落ち込んでしまうのだもの！今の

僕は息を吹き返して、蘇っているんだよ。」と言うことができた。
　しかし次にオブローモフがオリガを訪ねて、領地の管理を人任せで済まそうとして、それには結婚まで一年かかるという話をすると、彼女はあまりのことに気を失ってしまう。漸く意識が戻った彼女は、こう言う。

> 「私、とてもつらいの、傲慢のせいだわ。私は罰があたったのよ。自分の力に期待をかけ過ぎたから。私はあなたを生き返らせてみせる、あなたは私のためにまだ生きることができると考えていたのよ。でもあなたはとっくの昔に死んでしまっていたのね。私はその間違いを見抜けなくて、ずっと待っていたのよ。私が愛していたのは、あなたの中にあってくれたらいいと望んでいたもの、シュトルツさんと二人で作り上げたあなたの姿だったのね。未来のオブローモフを愛していたのよ！　あなたは気立てが良くて、賢くて優しくて、上品だわ…なのに破滅するのね。何があなたを台無しにしてしまったの？　この災いはなんとも呼びようがないわ」「あるよ。オブローモフシチナだよ！」

とオブローモフは漸く答える。
　オブローモフは、家へ帰ると、もう長いこと着ていなかった、そして家主のアガフィヤが丹念に繕った、東方風のガウンを、召使のザハールが彼に着せかけたのにも気づかぬほどの落胆ぶりだった。その後、彼は熱病で倒れた。

・第四部　アガフィヤとの結婚から死へ

　熱病から一年ほどで回復したオブローモフは、家主のアガフィヤと次第に親しくなった。アガフィヤはオリガとは正反対のタイプで、以前からオブローモフは、料理や家事に打ち込んでいる彼女のむっちりとした二の腕や肘に fetishism を抱いていた。

> 「アガフィヤ・マトヴェエヴナは、せきたてたり、何か要求したりすることは一切なかった。そのおかげで、自尊心にかられた願望や欲求、偉業を成し遂げたいという志向、時が過ぎ去り自分の力は朽ちていくのに、自分は良い事も悪い事も何一つやってこなかった無益な存在なのだという苦痛は彼の心に生まれない。彼はあたかも高価な植物のように、目に見えぬ手によって暑さを除ける日陰の雨避けの下に植えられて、面倒を見て可愛がられているかのようだった。」

　アガフィヤはオブローモフを大切に思い、死ぬまで無限に尽くしたいという献身的な愛で、オブローモフカ村さながらの数々の料理で彼を満足させる。ある時彼を訪問したシュトルツは、「こんな生活から抜け出さなくちゃ君は脳卒中になってしまう。僕のところへ来たまえ」と、救出を試みるのだが、オブローモフは動こうとしない。
　オリガはオブローモフとの破局の後、自尊心を傷つけられ、スイスへ傷心の旅に出かけ、そこでシュトルツと再会する。シュトルツはオリガがすっかり成熟した大人になっていることに驚く。そして二人は必然的に恋に落ちて、結婚する。
　数年が過ぎ、オブローモフはアガフィヤと結婚し、息子アンドレイ（アンドリューシャ）を授かる。

名前はシュトルツにあやかって付けられた。
　シュトルツとオリガも順調な充実した結婚生活で子宝にも恵まれたが、オリガは時折そこはかとなく憂鬱な気分に陥る。　そしてオリガとシュトルツは、共通の親友、オブローモフの思い出話をする。

「あの男にはどんな知性よりも貴重なものがある、正直で誠実な心だ。それをこれまでの生涯ずっと無疵で保ってきたんだ。彼の魂はいつも純粋で、明るく、正直だ...それは、クリスタル・ガラスのように透明な魂なんだよ。こんな人間はめったにいない。有象無象のなかの真珠だよ！」

オリガも「あの人を見捨てないでね」と言う。
オブローモフはとうとう卒中の発作に倒れるが、アガフィヤとの生活を

「もはやここ以外に行き場所はないし、探し求めるべきものもない。たとえ詩はなくとも、自分の生活の理想は実現したのだと、そう決め込んでしまった。」

そして眠りとも目覚めともつかぬもの思いに耽る中、déjà vu の光景を目にする。

「蜜と乳の河が流れ、誰もが働きもしないでパンが食べられ、金銀の衣服を着ている約束の地へ辿り着いたような幻を見る。彼は乳母にぴったりと身を寄せ、その声にじっと耳を澄ます。《ミリトリーサ・キルビチエヴナ！》」と、乳母はおかみさんの姿を指しながら言う。」

　シュトルツが最後の救出を試みようと、オブローモフを訪問するが、オブローモフは、「僕はこの世に生きているのが恥ずかしい！でも、君と一緒に君の道を行くことはできないんだ」と断り、ただ「僕のアンドレイを忘れないでおくれ！」と頼む。
　それから五年が過ぎ、オブローモフは既に墓地の質素な墓石の下に眠っている。アガフィヤは最愛の息子アンドレイを、自分とは違う貴族の坊ちゃんなのだからと、シュトルツ夫妻に差し出す。
　エピローグは、シュトルツが友人の作家にオブローモフの話をして、この話を本にしたらいいと言う。それがこの本に書かれていることである。

イリヤ・イリイチ・オブローモフとオリガ・イリインスカヤ
　イリヤ（エリヤのロシア語名）は父親の名前もイリヤ→過去志向を暗示。
　当時、スラブ派と西欧派の論争が盛んであった。
　物語の始まりにおいてオブローモフは 32 歳か 33 歳。オリガは 20 歳であり、その年齢差は 12 歳である。オブローモフがペテルブルグに来てから 12 年がたつ。
　物語の始まりは 5 月 1 日。郊外のエカテリンゴフで春の始まりを祝う行楽祭の日。
　オリガの情熱、理性をもってしても、結局オブローモフを破滅の泥沼から立ち上がらせることはできない→　オリガ（アニマ）vs. Great Mother の戦い。

アガフィヤ・マトエヴナとミリトリーサ・キルビチエヴナ

　オブローモフはオリガとの別れの後、本能的に故郷オブローモフカの過去に回帰するように、また雨風から庇護してくれる母なるものの下に潜り込むように、アガフィヤと親密になってゆく。アガフィヤの両義性。

オブローモフは彼女との暮らしの中で、昔オブローモフカ村で聞かされた「善良な魔法使い」ミリトリーサ・キルビチエヴナの幻想を再び見る。

フォークロア（お伽話）「ボヴァ王子の物語」。19 世紀ロシアにおけるその内容：ミリトリーサは夫殺し。年老いた王である夫を恋人ダドンと共謀して殺した。ミリトリーサの息子ボヴァ王子は、父親殺しの復讐のため、母を罰する→ハムレット的な物語

イリヤ・ムーロメツとイリヤ・イリイチ

イリヤの名前→ロシアの英雄叙事詩中最大最強の英雄、イリヤ・ムーロメツ。英雄譚の主人公としてユニークなのは、彼の前半生。

アンドレイ・オブローモフに託された夢。アンドレイ（Andrew）は、ロシアの守護聖人。

『モスクワ―ペトゥシキ』のヴェーニャ

梃子でも一歩も動かぬオブローモフとはまた違うタイプだが、もう一人の極めつけの破滅型 negative hero は、『モスクワ―ペトゥシキ』（邦訳題名『酔どれ列車モスクワ発ペトゥシキ行』）の作者と同名の主人公、ヴェネディクト・エロフェーエフ（ヴェーニャ）である。この作品が書かれたのは 1970 年だが、公式にソ連国内で刊行されるまでに二十年近くの歳月を要した。その間、初めのうちはサミズダート（地下出版）で、やがて亡命ロシア人社会で、知る人ぞ知る幻の名作として愛読され、今や二十世紀文学の古典の一つと考えられている。

この作品のプロット自体は極く単純なものだ。主人公（奇しくもオブローモフとほぼ同い年の 33 歳）が、ひどい酩酊のうちにモスクワから約 120 キロ離れたペトゥシキへ列車で向かう行程を一人称で語る道中記である。ヴェーニャにとってモスクワとはクレムリンに象徴される俗悪な浮世の憂さに満ちた世界であり、ペトゥシキとは「冬も夏もジャスミンの花の枯れることのない」地上の楽園である。

おそらくヴェーニャにとってのペトゥシキは、オブローモフにとってのオブローモフカ村であり、現実から逃避するための場所である。

彼は道中もひたすら酒をあおり続け、他の乗客ばかりか時には天使や悪魔とも言葉を交わしながら、ペトゥシキを目指す...。ところが行きついた先はなぜかモスクワであり、しかもそこで何者かに殺されてしまう。いわば饒舌なアル中男の自堕落な生活とその非業の死の物語なのだが、これは作品の表層を覆うプロットにすぎない。

ヴェーニャのカクテルと社会主義リアリズムのパロディ

この表層プロットが作品の「肉体的側面」であるとするなら、「知的側面」に相当するのは、ヴェーニャの言葉の至るところに鏤められた他のテクストからの引用、アリュージョン、もじり、パロディであろう。それらの源泉となるのは、聖書、ロシアや西欧の文学作品、音楽、絵画、彫刻、そしてソ連社会主義

イデオロギーのプロパガンダ、スローガンである。
たとえば、ヴェーニャはただのヴォトカでは物足りず、さまざまなオリジナル・カクテルを作る。

笑うな。俺はカクテルの創作にかけちゃ、ベテランだ。一杯の「カナンのバルサム」には、遊び心もあれば、イデアもパトスもある。手短に「カナンのバルサムの製法をメモしておきたまえ。人生はただ一度、せっかくの人生、その指針を誤ってはならぬ。

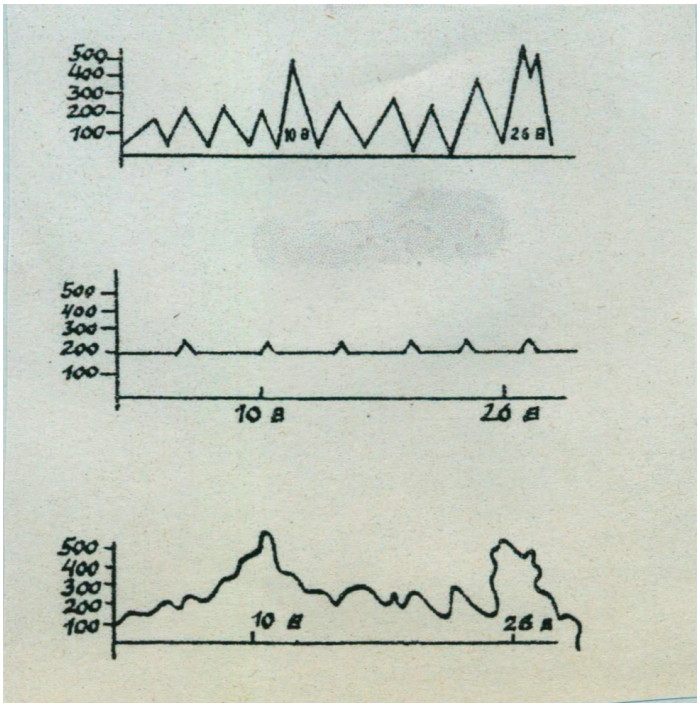
メチルアルコール　100 グラム
ベルベット・ビール　200 グラム
精製ニス　100 グラム

この「人生はただ一度...」という文句は、社会主義リアリズムの古典とされるオストロフスキーの『鋼鉄はいかにして鍛えられたか』の誰もが知る一節のパロディなのだ。

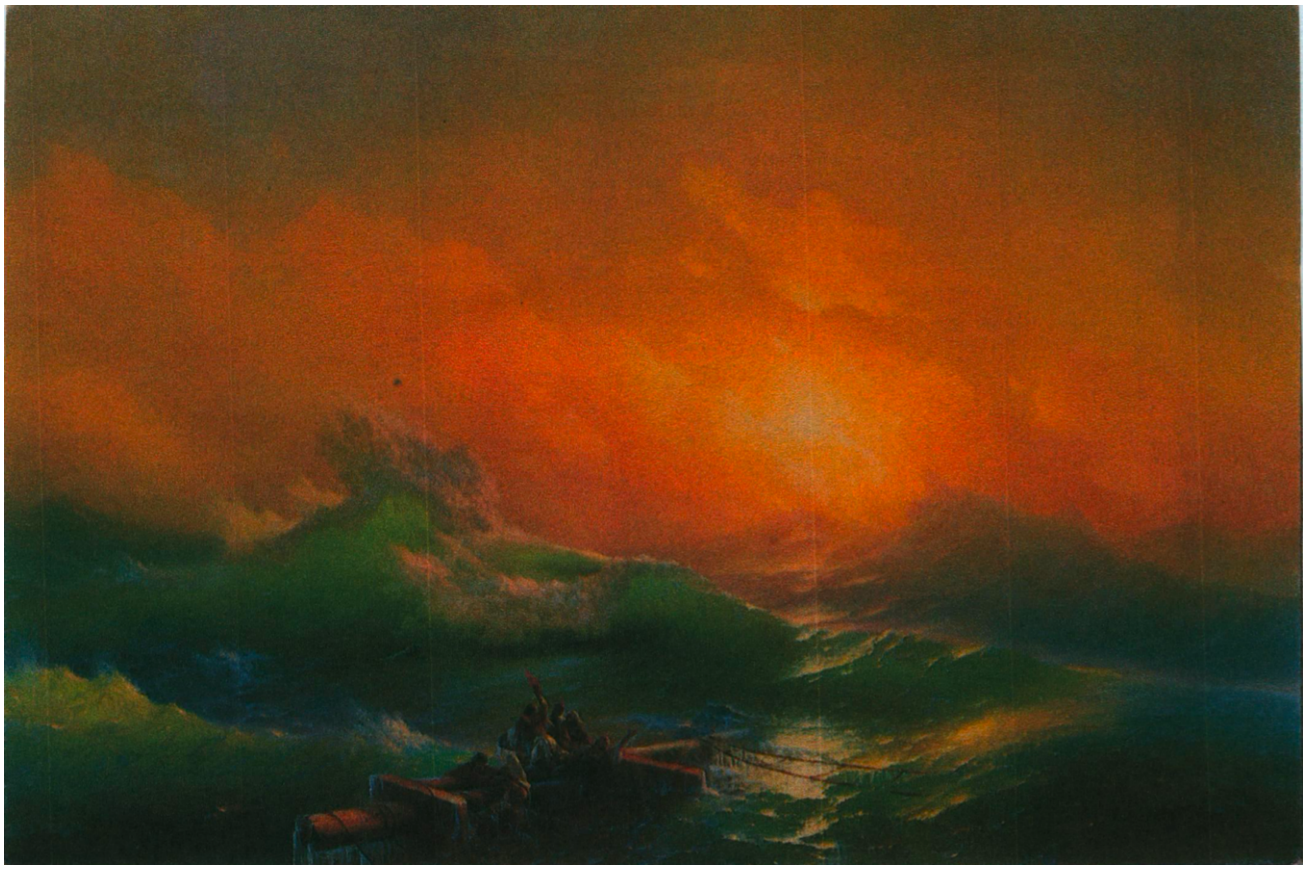
アルコール消費グラフと終末論

もう一つ例を挙れば、ヴェーニャが書いた職場の人間のアルコール消費量のグラフがある。

それがどんなグラフだったか教えてやろうか？　実に単純なもんさ。上質紙に黒の墨で二本の線が描いてある――一本は水平軸、もう一本は垂直軸だ。水平軸には、先月の労働日が順を追って書いてあり、垂直軸には、純粋アルコールに換算した飲んだ酒のグラム数が刻まれている。もちろん、勘定に入っているのは、仕事中と仕事前に飲んだ量だけだ。



いちばん上はコムソモール員ヴィクトル・トトシキンのグラフ、次は 1936 年以来の共産党員よぼよぼの耄碌爺いアレクセイ・ブリンジャエフだ。それで一番下、これは長編叙事詩『モスクワ―ペトゥシキ』の作者たる小生のものだ。本当に面白いグラフだろう？　上っ面を眺めただけでも面白いよな。ヒマラヤかチロルか、バクーの石油採掘所か、はたまたクレムリンの壁の天辺か。『第九の波濤』に見えるものもある。



「第九の波濤」は、海を描く画家アイワゾフスキーの作品で、嵐の中で最大の大波がいましも難破船の船員たちに襲いかかろうとしている。しかし、これは、最後の大波でもあり、画面の右手には、太陽が描かれている。この大波を越えれば、新しい未来が待っているという終末論的メッセージも読み取れる。現在のこの世がもうすぐ終わり、ヴェーニャの命ももうすぐ尽きるという終末的気配は、作品全体に満ちている。

瘋癲行者の自発的受難

そしてこの作品がこれほど愛される理由は、さらに「精神的側面」も持っているからだろう。ヴェーニャの無謀極まる過激な飲酒には、ラブレー的な旺盛な食欲やそれを満たす快楽とはかけ離れた意味合いがあるのだ。彼にとって飲酒という行為は、キリストの受難の道行きを自ら辿ること、自発的受難の精神なのだという...。

自発的受難とは何か？　ここにロシア独特の聖人 юродивый というものがある。英語では、holy fool と訳されるが「聖愚者、佯狂者、瘋癲行者」などと訳せるだろうか。「コリント前書 4:10」の「我らはキリストのために愚かなる者となり」由来で、キリストが己を空しくして下僕の姿でこの地に現れ、苦しみと屈辱を受けたことを自らも追体験し、その苦行によって己れの魂の救済を求めようとする聖人だ。そのためには、この世の富、名誉、家ばかりか、人間として最後の尊厳である知性までも神に捧げ、自発的に受難の道を歩く者である。瘋癲行者はほとんど一糸纏わぬ姿で寒さに震えながら放浪生活を続け、奇行を重ねて人々に蔑まれながらも、一方では神や天使とも言葉を交わし、奇跡を行うこともあり、さらに権力者の驕りや俗世の虚しさを見縊る能力にも長けた、笑いと敬虔・厳粛な世界の境界線を生きる存在である。ヴェーニャの生き方は瘋癲行者のそれに極めて近いものであるが、彼が断末魔にこの世の最後の記憶として見るのが Ю の文字であることも、юродивый として生きた彼の人生を象徴しているのだろう。

「精神的側面」としゃっくりの間隔

ヴェーニャは、「精神的側面」はロシア人の領分だ、ということを次のように語る。

> ヤンキーにでもやらせとけばいいのさ。銀河系外の天文学なんか。精神医学はドイツ人に任せとけ。スペイン人みたいな悪党は皆、闘牛でも見に行きゃいいし、ろくでなしのアフリカ人にはアスワン・ダムを自分で造らせりゃいいんだ。我々は、いいか、しゃっくりに専心しようではないですか。

と言って、酒を飲み過ぎたとき、突如として沸き起こるしゃっくりの間隔について述べ始める。

> 8-13-7-3-18
>
> 試しにこの数字に何らかの周期性があるか、それを探ってみるとしよう。何か公式を導き出して次の間隔を言い当てられるかどうか。やってみてもらいたい。人生は、諸君の浅はかな構想をきっと覆すことになるはずだ。
>
> 15-4-12-4-5-28
>
> 一人一人の人生の浮き沈み、歓喜と不幸の交替も、同じことではないか―しゃっくりの数字は規則性の片鱗すら、これっぽっちも見せやしない。しゃっくりはあらゆる法則を凌駕する。そしてついさっき、その始まりであんた方を驚嘆せしめたように、またその終焉でもあんた方を驚嘆せしめる。死が予言も予想も不可能であるのと同様に。

オブローモフが、エジプト旅行なんて、イギリス人に任せておけ、と言ったように、ヴェーニャもまた、ロシア人にはもっと別の使命があると言うのだ。しかもそれは、現代科学では決して計測・予測不可能

な、神秘的領域、あるいはもっと言えば、神学的領域とでも言えるものかもしれない。それを、過剰飲酒によるしゃっくりの発生間隔という、奇想天外な視点から語るところが人々に愛される所以であろう。

オブローモフもヴェーニャも、近現代社会の価値観では、どう考えても切り捨てられる資質の持ち主と言わざるを得ない。にもかかわらず、なぜ作者たちがこうしたアンチ・ヒーローを格別の愛情とユーモアをこめて描き出したのか、ここまでの話で、少しは明らかにできたでしょうか。

引用・参考文献

Гайсер-Шнитман,Светлана. Венедикт Ерофеев «Москва-Петушки» или «The Rest is Silence». Peter Lang. 1989.

Гончаров И.А. Обломов. Санкт-Петербург, 2012. [ゴンチャローフ『オブローモフ』木村彰一、灰谷慶三訳、講談社、1983 年]

Гродецкая А.Г. Где учился, кем служил Илья Ильич Обломов и кто такая Милитриса Кирбитьевна... // *Гончаров.* указ. кн. с.496-505.

Ерофеев, Венедикт. Собрание сочинений том 1. Москва, 2001.[ヴェネディクト・エロフェーエフ『酔どれ列車、モスクワ発ペトゥシキ行』安岡治子訳、国書刊行会、1996 年]

Краснощекова Е.А. Иван Александрович Гончаров Мир творчества. Санкт-Петербург, 1997.

Мельник В.И. Духовный путь И.А.Гончарова. Москва. 2019.

Недзвецкий В.А. Роман И.А.Гончарова «Обломов» Путеводитель по тексту. Москва, 2010.

Эпштейн, Михаил. После карнавала, или Вечный Веничка // *В. Ерофеев.* Оставьте мою душу в покое. Москва, 1995, с.3-30.

Baratoff, Natalie. *Oblomov A Jungian Approach – A Literary Image of the Mother Complex.* Peter Lang, 1990.

Holmgren, Beth. *Question of Heroism in Goncharov's Oblomov,* in *Goncharov's Oblomov A Critical Companion,* ed. Diment, Galya. Northwestern University Press, 1998, p.77-89.

Singleton, Amy C. *Eternal Return: Goncharov's Oblomov as Odyssey* in *No Place Like Home*. State University of New York Press, 1997, p.69-92.

安岡治子「瘋癲行者が語る黙示録――『モスクワ―ペトゥシキ』をめぐって」、東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻紀要 ODYSSEUS 第 1 号、1997、47-59 頁

第 28 回地域文化研究専攻主催公開シンポジウム
ぐうたら、酔いどれ、ならず者——文学におけるアンチ・ヒーローの系譜　2020 年 10 月 31 日

アメリカン・アンチヒーローの西部
21 世紀のウェスタンとハードボイルド探偵小説におけるヒーロー像の変容

井上博之（地域文化研究専攻）

1. イントロダクション

- ウェスタンとハードボイルド探偵小説——アメリカン・ヒーローの西部

1-1: ガンファイターへの夢は、アメリカの風土に根ざしながら、その現実を脱出し、個人的および国家的な成長をとげることへの願望をあらわしていて、その安直さをどのように批判しようとも、アメリカ人の心から容易に消え失せるものではないように思われる。（亀井 226）

1-2: もともとハードボイルド小説と呼ばれる作品の中心にあったのは、ヒーローに与えられた「ハードボイルドな」性格づけだった。ハードボイルドな性格をもち、それにあわせて行動する男を主人公にした小説が、まずハードボイルド小説と呼ばれるようになったのである。［……］

　西部への道がウェストコーストで行き止まりになったとき、資本主義大国アメリカは、新しいフロンティアを侵略戦争の中に求めた。内なるフロンティアを、人種差別や赤狩りや消費文明の謳歌に求めた。享楽主義が狂乱の二〇年代にはじまった。どの一つをとっても、不幸な選択がもたらした閉ざされたフロンティアだった。そのハードボイルドな時代が、私立探偵に変身した新しいヒーローを、巨大な悪のジャングルという囲いの中に追いやったのだ。（小鷹 9, 10–11）

- パトリック・デウィット　Patrick deWitt, 1975–

『シスターズ・ブラザーズ』（*The Sisters Brothers*, 2011）
提督（the Commodore）に雇われた殺し屋兄弟チャーリーとイーライのシスターズ兄弟
1851 年、オレゴン→カリフォルニア→オレゴン
映画版：『ゴールデン・リバー』ジャック・オーディアール監督、2019 年

- トマス・ピンチョン　Thomas Pynchon, 1937–

『LA ヴァイス』（*Inherent Vice*, 2009）
マリファナ常習者のヒッピー探偵ラリー・ドック・スポーテッロ
1970 年、ロサンジェルス
映画版：『インヒアレント・ヴァイス』ポール・トマス・アンダーソン監督、2014 年

2. 黄金時代と遅れてきた（アンチ）ヒーロー

- 西部、カリフォルニア、夢のあと

2-1: Here before us was the very thing that induced thousands of previously intelligent men and women to abandon their families and homes forever. The both of us stared at it, saying nothing. (deWitt 102)

こういう川で砂金を探すため、何千人もの分別ある人びとが、故郷と家族を永遠に捨て

ているのだ。おれたちは無言でその小川を見つめた。（デウィット 130）

2-2: “[. . .] ’Course, now that’s impossible to do, Charlie Manson and the gang have fucked that up for everybody. End of a certain kind of innocence, that thing about straightworld people that kept you from hating them totally, that real desire sometimes to help. No more of that, I guess. One more West Coast tradition down the toilet along with three percent product anymore.” (Pynchon 38)

「[……] もちろん今じゃそんなこと無理よね。あのチャーリー・マンソンとお仲間たちが何もかも台無しにしてくれた。これも無垢の終わりってもんでしょ。昔はストレートな世界の人たちにもどっか憎みきれないトコがあったし、こっちも誰かの役に立ちたいってたまに本気で思ったりしてた。ああいうのはたぶんみんな消えちゃったわね。純度三パーセントかそこらのヘロインといっしょに、西海岸の伝統がまた一つトイレに流れていっちゃったんだわ」（ピンチョン 59–60）

2-3: Tellingly, the westward movement [in Westerns] tends to stop before reaching the Pacific, as its unpassable expanse would dampen the genre’s expansionist energy [. . .]. (Moretti 69n) →ウェスタンで太平洋が映されることはほとんどない。

- ジャンルをめぐる自意識

2-4: You will often see this scenario in serialized adventure novels: Two grisly riders before the fire telling their bawdy stories and singing harrowing songs of death and lace. But I can tell you that after a full day of riding I want nothing more than to lie down and sleep [. . .]. (deWitt 10）

遠目には、安っぽい連載冒険小説の一場面に見えたかもしれない。ふたりの薄汚いカウボーイが焚き火を囲んで座り、女の話に興じては死や金のことを悲痛な調子で歌う、というやつだ。しかし実際のところ、一日じゅう馬に揺られれば眠ることしか考えられなくなる［……］。（デウィット 30／訳文一部変更）

2-5: “If they move I really will kill them.” (deWitt 238）

「もちろん、ちょっとでもヘンな動きをみせれば、おれだってすぐに引き金を引くさ。」（デウィット 315） cf. “If they move, kill ’em.” (Pike Bishop in *The Wild Bunch*)

2-6: “’Cause PIs are doomed, man,” Doc continuing his earlier thought, “you could’ve seen it coming for years, in the movies, on the tube. Once there was all these great old PIs—Philip Marlowe, Sam Spade, the shamus of shamuses Johnny Staccato, always smarter and more professional than the cops, always end up solvin the crime while the cops are followin wrong leads and gettin in the way.” (Pynchon 97)

「なんつっても私立探偵は消えゆく種族だ」とドックはさっきの会話を続ける。「何年も前からそうだ。映画やテレビを見れば分かる。昔は偉大な私立探偵が目白押しだった。フィリップ・マーロウ、サム・スペード、それに探偵の中の探偵、ジョニー・スタッカート。警官なんかよりずっと頭が切れて、プロ中のプロで、事件だって最後はきっちりきれいに解決した。そのあいだ警察は間違った手がかりを追っかけて足手まといになるばかりだ」（ピンチョン 136）

3. ジャンルと様式（formula）の変容

- ウェスタン・ヒーローとその変容

社会の中心にいるヒーロー：『ヴァージニアン』（*The Virginian*, 1902）

アウトサイダー化するヒーロー:『駅馬車』(*Stagecoach*, 1939)、『シェーン』(*Shane*, 1949; 1953)
多様化する（アンチ）ヒーロー：『ウエスタン』（*Once upon a Time in the West*, 1968)、『ワイルドバンチ』（*The Wild Bunch*, 1969）

- ハードボイルド探偵とその変容

タフガイ探偵の登場：『マルタの鷹』（*The Maltese Falcon*, 1930; 1941)、『大いなる眠り／三つ数えろ』（*The Big Sleep*, 1939; 1946）
探偵のアンチヒーロー化：『ロング・グッドバイ』（*The Long Goodbye*, 1973)、『チャイナタウン』（*Chinatown*, 1974）
パロディー／コメディー化：『ビッグ・リボウスキ』（*The Big Lebowski*, 1998）

4. ならず者兄弟、実家に帰る——『シスターズ・ブラザーズ』

- 規範的ヒーロー像からの逸脱

クモやヘビが苦手である、魔女の呪いがこわい、肥満気味の体型を気にしている、殺し屋をやめて店を開きたい、歯磨きが好きになる、菜食ダイエットを試す、殺すことになっている相手が悪いやつではないかもしれないと思う、決闘のルールを守らない（それがよくないことも自覚している)、有能な殺し屋ではないと思っている、殺すことになっていた相手と仲よくなる、川から採取した金を突然あらわれた先住民に取られる、町の娼婦たちに襲われて金を奪われる、雇用主である提督に反逆する、母親のいる実家に帰る
→寡黙なプロフェッショナルとしての殺し屋像の解体、善（good guys）／悪（bad guys）の二項対立の解体、白人男性を中心とするジャンルへの（自己）批判・パロディー化

- 1 人称の語り

4-1: I dampened the bristles and tapped out a thimbleful of the powder. “Up, down, side to side,” I said, for these were the words the doctor had spoken. My mouth was filled with the mint-smelling foam and I scrubbed my tongue raw. [. . .] My breath was cool and fine-smelling and I was greatly impressed with the tingling feeling this toothbrush gave me. I decided I would use it every day [. . .]. (deWitt 36–37)
ブラシの毛先を湿らせ、少しだけ粉をつけた。歯医者のワッツがやっていたように、「上、下、左、右」と唱えながら歯ブラシを動かした。すぐに口のなかはミントの匂いがする泡でいっぱいになり、おれは舌までごしごしこすった。[……] 口はひんやりして気持ちいいし、いい匂いはするし、わずかにちくちくするこの感じを、おれは好きになりはじめていた。これからは毎日歯を磨こうとおれは決めた。(デウィット 52／訳文一部変更)
→美化されない人物像
cf. 『ヴァージニアン』（*The Virginian*)、『シェーン』（*Shane*）の語り

- 黄金の夢の崩壊

黄金の追求がもたらすさまざまな害悪
＋ すべてを失ってドロップアウトすることから再生が始まる？

5. ぐうたら探偵の活躍——『LA ヴァイス』

- ソフトボイルド探偵と増殖するミステリー

5-1: But where was this tail he was on going to take Bigfoot finally? How far in this weird

twisted cop karma would he have to follow the twenty kilos before it led him to what he thought he needed to know? Which would be what again, exactly? Who hired Adrian to kill his partner? What Adrian's connection might be to Crocker Fenway's principals? Whether the Golden Fang, which Bigfoot didn't believe in to begin with, even existed? How smart was any of it, right now for example, without backup, and how safe was Bigfoot likely to be, and for how long? (Pynchon 350)

だがこの尾行によって、ビッグフットは最後にどこへ行き着くのだろう？　この二〇キロのヘロインが自分の求めるネタへと導くまで、どれほど深く、警察官の不気味にねじくれた業を積み上げながら進んで行かなくてはならないのか？　そのネタって、はっきり言って何なのだ？　エイドリアンを雇って相棒殺しをさせた者の正体か。クロッカー・フェンウェイの思想信条に、エイドリアンがどのように絡んでいたかということか？　自分では信じてもいない〈黄金の牙〉の存在の真偽か？　そもそもそんな疑問を持つこと自体、賢いことなのか——たとえば今この瞬間、バックアップもなしに探りにいくことが、ビッグフットにとってどの程度安全なことなのか？　その安全は、いつまでもつのか？（ピンチョン 476）

- 戻れない過去

5-2: "I do get the feeling," Doc said tentatively, "you'd rather be someplace else?"

"Back where I was would be nice," with a small break toward the end that Doc hoped was audible only to PIs who make a habit of wallowing in sentiment. (Pynchon 161)

「分かるよ」とドックがためらい気味に。「行けるとしたらどこへ行きたい？」

「元いた場所なんて悪くないな」最後はほんのわずかに涙声だった。いつもどっぷり感傷に浸ってばかりいる探偵だからこそそれが分かった。ほかの誰にも気づかれていないことをドックは願った。（ピンチョン 223）

5-3: "[. . .] Do you know what he said? We have it on tape. 'I feel as if I've awakened from a dream of a crime for which I can never atone, an act I can never go back and choose not to commit. [. . .]'" (Pynchon 244)

「［……］あの男、何とのたまったと思う？　我々のテープに録ってある。『私は夢でも見ていたかのように罪を犯しつづけてきたが、償うことのできないその罪から今目覚めた思いでいる。もう一度過去に戻って正しく生き直すことはできない。［……］』」（ピンチョン 333）

- 変化の可能性

5-4: "Looks like they got what they wanted, too. My bad luck and lousy timing. Man sees the light, tries to change his life, my one big chance to rescue somebody like that from the clutches of the System, and I'm too late. And now Mickey's back to them old greedy-ass ways."

"Well, maybe not, Sportello. What goes around may come around, but it never ends up exactly the same place, you ever notice? Like a record on a turntable, all it takes is one groove's difference and the universe can be on into a whole 'nother song." (Pynchon 334)

「ＦＢＩも望みを叶えたってことかい。オレも運とタイミングの悪い男だねえ。光に触れてさ、生き方を変えようとした男を〈体制〉の握り拳からうまいこと奪取する一世一代のチャンスを、ミスミス逃しちまったってこと。それでミッキーは強欲資本家に逆戻

りって」

「そう言い切れるかな、スポーテッロ。行ってしまった者も巡り巡って戻ってくるかもしれん。ただまったく同じ場所に戻ってくることはない、ターンテーブルのレコードと同じにな。知ってたか、スポーテッロ、溝一本の違いで、ユニバースにまったく別の歌が響くってわけだ」（ピンチョン 455）

5-5: "You know what the Indians say. You saved my life, now you've got to—."

"Yeah, yeah, some hippie made that up." These people, man. Don't know nothin. "You saved your life, Coy. Now you get to live it." He hung up. (Pynchon 363)

「インディアンの掟、知ってるよな。俺の命を救ったのはおまえだ。だから、おまえはこれから……」

「おいおい、そんなのどっかのヒッピーのでっち上げだって」まったく、こいつら、何も分かってない。「あんたが自分で自分を救ったんだ。コーイ、その命、ガッチリ生きろよ」彼は電話を切った。（ピンチョン 495）

cf. "I'm responsible for you now. You know, the Chinese say that once you've saved a person's life, you're responsible for it forever, so I'm committed." (John "Scottie" Ferguson in *Vertigo*)

6. アメリカン・アンチヒーローの西部

- ジャンルの様式とその力

6-1: "[. . .] The formula works, all right. It works just as well as I had hoped or better." (deWitt 255)

「［……］あの薬［formula］はちゃんと機能するぞ。単に機能するだけじゃない。おれの予想以上に強力だった」（デウィット 336）

- 西部を書き直す／西部でやり直す

引用・参考文献

Aquila, Richard. *The Sagebrush Trail: Western Movies and Twentieth-Century America*. U of Arizona P, 2015.

Brombert, Victor. *In Praise of Antiheroes: Figures and Themes in Modern European Literature, 1830–1980*. U of Chicago P, 1999.

Cawelti, John G. *Adventure, Mystery, and Romance: Formula Stories as Art and Popular Culture*. U of Chicago P, 1976.

deWitt, Patrick. *The Sisters Brothers*. 2011. Ecco, 2012. ［パトリック・デウィット『シスターズ・ブラザーズ』茂木健訳、創元推理文庫、2014 年］

Inherent Vice. Directed by Paul Thomas Anderson, Warner Bros., 2014.

Moretti, Franco. *Far Country: Scenes from American Culture*. Farrar, Straus and Giroux, 2019.

Naremore, James. *Film Noir: A Very Short Introduction*. Oxford UP, 2019.

Nicol, Bran. *The Private Eye: Detectives in the Movies*. Reaktion Books, 2013.

Pynchon, Thomas. *Inherent Vice*. 2009. Penguin Books, 2010. ［トマス・ピンチョン『LA ヴァイス』栩木玲子、佐藤良明訳、新潮社、2012 年］

Simmons, David. *The Anti-Hero in the American Novel: From Joseph Heller to Kurt Vonnegut*. Palgrave Macmillan, 2008.

The Sisters Brothers. Directed by Jacques Audiard, Annapurna, 2018.

亀井俊介『サーカスが来た！——アメリカ大衆文化覚書』平凡社ライブラリー、2013 年

小鷹信光『ハードボイルド・アメリカ』河出書房新社、1983 年

第 28 回地域文化研究専攻主催公開シンポジウム（2020 年 10 月 31 日）
「ぐうたら、酔いどれ、ならず者――文学におけるアンチ・ヒーローの系譜」

上杉未央（日本学術振興会特別研究員 RPD）

参考資料：コメント中で言及する作品のあらすじ

スタンダール『赤と黒』(*Le Rouge et le Noir*, 1830)

ナポレオン帝政後ブルボン王朝が復帰して平民の青年には出世の道が閉ざされた時代、小都市ヴェリエールの製材所の三男ジュリアン・ソレルは町長レナール氏の家に家庭教師として採用される。純真で優しいレナール夫人は彼の貧しさに同情し、美男で自尊心の高い彼も初めて出会った貴婦人である彼女に魅かれる。崇拝するナポレオンを手本に気後れを克服し彼女と関係を結ぶが、夫人との恋愛に魅惑されつつも彼は野心を捨てきれない。不倫が発覚しそうになり、彼はブザンソンの神学校に送られる。彼の才能を認めた神学校長ピラール師の推薦で、彼はパリの有力貴族ラ・モール侯爵の秘書となる。

ラ・モール家では、上流社会の青年たちに劣等感を抱きつつも、彼は自分を抑え、その天分と学識で次第に重きをなす。青年たちの崇拝の的である侯爵令嬢マティルドは、先祖たちが持っていた力強さを失い礼儀ばかり気にする崇拝者たちに飽き飽きし、平民出身ながら誇り高いジュリアンに魅かれる。強い自尊心の持ち主であるジュリアンとマティルドは反発と牽引を重ねつつ結ばれてゆく。彼女は妊娠し、父侯爵に彼と結婚すると宣言するが、娘を高位の貴族に嫁がせることを夢見ていた侯爵は激怒する。娘の度重なる懇願に侯爵もこれを許しかけるが、人物確認のために侯爵がレナール夫人に出した手紙に、ジュリアンは地位・金銭目当てに有力な夫人を誘惑する人物だとの返事が届く。

ジュリアンはこれを見るなりヴェリエールに赴き、教会でミサに出席中の婦人に発砲し逮捕される。牢獄で彼は野心の道を閉ざされた自分の心中を見つめ、自分は本当は母性的な愛情で慈しんでくれた夫人を愛していたことに気づく。レナール夫人も牢獄の彼を訪ね、死刑執行までのわずかの期間を二人は真の愛情のうちに過ごす。マティルドは斬首された彼の首を抱いて山中に設けられた墓所まで従い、夫人は愛人の死後 3 日後に自分の子供たちを抱きながら死ぬ。

小野潮『知っておきたいフランス文学』明治書院、2010 年、79－80 頁

ヴィクトル・ユゴー『レ・ミゼラブル』(*Les Misérables*, 1862)

家族の飢えを満たそうとわずかのパンを盗んで徒刑囚となったジャン＝バルジャンは長年の拘禁の後釈放されるが、世間はかつての徒刑囚に冷たい。好意で彼を泊めてくれた司祭館で再び盗みを働くが、司祭は警吏に、自分が銀食器、銀の燭台を与えたと言ってくれる。

名前を変え、ある街に住み着いた彼は工業化として成功し町長となる。そこに以前から彼を追うジャヴェル刑事が現われ、正体を見破られそうになるが、遠方で別人がジャンとして逮捕されジャヴェルは非礼をわびる。ジャンは自分と取り違えられ他人が裁かれるのを放置できず名乗り出る。

獄に繋がれた彼は脱走し、自分の工場でかつて働いていて娼婦にまで身を落として死んだフォンティーヌの娘コゼットを養女として引き取り、名前を変えパリに潜む。コゼットを公園で見かけた青年マリウスが彼女に恋をする。ジャンの逮捕に執念を燃やす刑事ジャヴェルの探索と、かつてフォンティーヌからコゼットを託されながら幼い彼女をこき使った悪党テナルディエのたくらみのため、ジャンは再び逃げ出さざるを得なくなり、マリウスはコゼットの消息を見失う。

パリの民衆暴動のおり、民衆側で戦い、傷つき警察に追われるマリウスを、ジャンはパリの下水道の中を背負って助け出すが、マリウスは誰が自分を助けてくれたのかわからない。暴動の最中、ジャンを捕まえたジャヴェルだが、逆に暴徒たちにつかまった彼を助けてくれたジャンの高貴な振舞いに自分が信じてきた正義が疑わしくなり、逮捕したジャンを解放し、自分はセーヌ川に身を投げる。

マリウスはコゼットと結婚するが、義理の父がかつての徒刑囚であると知りジャンに冷たくなり、ジャンはコゼット夫妻と離れて一人さびしく暮らす。ようやくのことでジャンこそ自分の命の恩人であるのを知ったマリウスはコゼットとともにジャンのもとへ赴くが、ジャンはすでに死の床にいた。

同上、100－101 頁

ギュスターヴ・フロベール『純な心』(*Un Cœur simple*, 1877)

フェリシテは幼少期に両親を亡くし、農家の下働きなどをして生きてきた。その間、村の青年テオドールと仲良くなり、求婚されるが、結局彼は裕福な家庭の娘と結婚してしまう。フェリシテは農場を去り、ノルマンディー地方ポンレベックのオーバン夫人の女中になって以降は、愛らしい子どもたち（ポールとヴィルジニー）の世話に生きがいを感じる。ヴィルジニーが寄宿学校に入った後は、たまに遊びに来る甥のヴィクトールのことを気にかける。ヴィルジニーは病気で、船員になったヴィクトールもまた病気によって亡くなってしまう。その後はオウムのルルを飼い、可愛がる。病気が原因で耳が遠くなり、オウム・ルルの声程度しか聴き取れなくなり、ますます孤独を深めるフェリシテは、ある日、ルルが亡くなっているのを発見する。オーバン夫人が亡くなったあとは、剥製にしたルルとともに自室に引きこもる。肺炎にかかり、死期が遠くないことを悟ったフェリシテはルルを引き取るよう司祭に頼む。ルルは、オーバン家の中庭に設置された仮祭壇に飾られる。聖体行列が行われた日、フェリシテは息を引き取る瞬間、彼女は途方もなく大きなオウムが自分を包み込むように羽を広げているのをみたように感じた。